

平成 22 年度自己評価結果公表シート

平成 23 年 4 月
学校法人笹塚幼稚園

1、本園の建学の精神（理念）

幼児教育を受けたい人は誰でも受けられる幼稚園であること。
就学前幼児の心身の発達及び社会性の獲得のためには「遊び」こそが重要であること。

2、教育目標

幼児教育に熱心な教諭のもと、幼児が喜んで興味を示すような環境を設定する。
「遊び」を活動の中心に据え、伸び伸びとした集団生活を営むことを通じてどんな時にもくじけない明るく元気で自主性のある人、「やる時はやる」けじめのつけられる人になるような教育を目指している。

3、本年度、重点的に取り組む目標・計画

新教育指導要領に基づき、乳児から幼児～就学までのこどもの育ちを連続的に捉える観点から保育内容や教職員の組織体制の強化及び教職員の日常的な資質向上をはかっていくことを(中)長期目標に据えて取り組んでいくための、課題の実現を重点項目とする。

4、評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	取組状況
教職員組織の状況について（全体）	組織全体の状況把握、点検が充分とは言えなかった。学年内の横の連携のみでなく、縦の連携にも力を注ぎたい。そのための組織環境の整備にも取り組んで行くことが 23 年度の課題である。
園務分掌による、または各々の組織内での責任のあり方について（全体）	指示や依頼を出し合うことが課題。個人情報管理などはそれぞれ徹底していた。他の教職員に自分の仕事を手伝ってもらったりしたことがあったが、感謝の気持ちを表現するマナーも徹底したい。
学年カリキュラムについて（全体）	リズム、音遊びについては各学年とも身近にある楽器(カスタネット)をもっと活用すると良かった。2 歳児教室の小さな子ども達と在園児との関わりを保育の中に何らかの形で取り入れたら良かった。縦わり保育については、形態がマンネリ化してきた一方、年齢を超えての日常的な交流へのきっかけという目的には余り効果が見られないため、23 年度は日常的な保育の流れの中で自然に関わりを持てるよう、合同で弁当を食べる機会を頻繁につくりたい。
指導計画や行事の内容は幼児の興味や関心、これまでの生活の様子、予想されるこれからの生活などを考慮して作成している（年少）	園児の中でブームになっているものを指導計画に取り入れた。特に“きのこ”はダンス・絵画・絵の具遊び・折り紙など様々な方向へ発展させることで意欲を引き出すことが出来た。又、皆がひとつのテーマに夢中になったことで友達同士の繋がりが生まれ、様々な面で子ども自身で発展させていた。
幼児が遊びを深めていくためのヒントやアイデア提供している伝えようとするための取り組みについて（年少）	子どもとじっくり遊びたくても、別の所でトラブルが起こるなどし、一緒に遊びを深めてあげることがあまりできなかった。ルールのある遊びは、できない子に教えながらできる子も同時に楽しめるようにしていくのが難しかったが、星組の園児に入ってもらった時はとてもスムーズだったので 23 年度も縦の繋がりを意識して遊びを展開したい。
特に配慮を要する幼児が望ましい方向へと変容していく過程に喜びを感じる（年少）	療育センターなどに通っている子ども達に対しては、保育者も実際に足を運んだり、アドバイス頂いて保育に生かせることを見つけられた。この子にとって「この場面では〇〇していなければならない」「ここまでは自力で行なう」など具体的に配慮することができた。カードを使ったり個別に伝え直す、などでその子自身も過ごし易く感じているのかわかり課題の達成などを一緒に喜ぶことができた。
幼児を褒めたり、励ましたり、目当てを持たせるような言葉掛けをしている（年少）	園生活に慣れない子ども達に対してできたことをたくさん褒めたり、「次はこれを頑張ってみようよ」と、子どもと“目当て”を相談しながら幼児を褒めたり励ましながら援助するよう心がけた。しかし、3 学期になり全体的に落ち着いてくると、できない場合に「〇〇できないと月組になれないよ」等言うこともあった。「もうすぐ月組だから頑張ろう」ともっと前向きな言葉掛けをするべきだったと反省している。

<p>幼児の年齢や発達に応じた関わり方をしている（年中）</p>	<p>個別の援助が必要な子がいたこともあり、「年中だから」と一くくりに見ずにその子その子に合った関わりをしてきた。具体的には言葉だけでなく視覚も使ってアプローチしたり、個別に伝えたりした。また課題をすぐにこなせてしまう子には、少し難しい課題を与えて挑戦する意欲を引き出せるように援助した。</p>
<p>楽しい雰囲気の中で安定して遊び込める環境構成をしている（年中）</p>	<p>2年保育の新入園児も多く、新しい環境での生活が始まるということもあり、初めての集団活動を安心して行なえ、楽しく過ごせる環境を設けることを心がけた。しかし、保育者自身が様々な遊びを提供しすぎて、それが本当に園児達が行いたい遊びであったかを省みることに欠けていたのが反省点である。2学期からは、これを踏まえて保育者は一歩引いて見守る姿勢でいると自然と友達との関わりを築き楽しんでいった。保育者の姿勢も大切な環境の一部だと改めて感じた。</p>
<p>見えない所で活動している幼児についてもある程度その活動の様子を推察することができる（年中）</p>	<p>月組になり、運動量も増えたため保育者の見えない所での子ども同士のトラブルが多く見られた。子どもなりに原因、理由があつたのトラブルとは言え、見えない所での出来事だと事実確認が難しいので、双方の言い分を良く聞いて時間を掛けて解決に導いた。一人ひとりを見つめておくことは難しいが、自由遊び中は、視野を広げ、どの子がどこで遊んでいるかを日常的にしっかり把握し、対応できるようにしておかなければならない。</p>
<p>幼児同士のトラブルに対し、適切な対応をしている（年中）</p>	<p>3学期頃から女の子同士のトラブルが目立っていた。喧嘩というより女の子特有の「意地悪？」な感じのもので、よく見ていないと詳細が解らず、当事者の話を聞いても今ひとつ状況が把握できないことが多かった。しかし自分達で解決し、仲直りするのも早かったので問題にするほどではなかったが、対応の適切さという点では課題が残った。</p>
<p>一人ひとりとみんなの関係を常に考えながら関わっている（年中）</p>	<p>一年を通しての課題でもあった。個別の援助が必要な子ども達もいたので全体とのバランスに特に留意した。子ども達全体の成長に応じ、子ども達自身でできることを任せることでやる気も引き出せ、その合間に、必要な子への個別の対応や援助を行なうなどによりクラスとしての歩調を遅らせるでも進ませすぎでもなく合わせていくことができた。</p>
<p>健康と安全への配慮について（年長）</p>	<p>ケガや事故が起きないような環境設定を心がけてきたが、3学期に特にケガをする子が多くなってしまった。その都度、環境設定を考えたり子ども達と一緒に考えたり、安全な道具の使い方や遊び方について気付けるような声掛けをしてきた。保育者自身ももっと気をつけて未然に防ぐことができるよう配慮することは大前提だが、子ども自らが注意をして危険を察知し、避けられるようにバランスを鍛える遊びなども積極的に行なうと更によかった。</p>
<p>環境構成よりも、幼児自らが活動を展開していけるような場や空間を構成している（年長）</p>	<p>自宅に持ち帰る手紙を子ども達自身で折ってお便りばさみに入れたり黒板の「1日の流れ」の記載を自分で見て把握したり、自分で材料を選んで遊んだり活動できる姿が見られた。その反面、天候による行事の変更などもあり、また、動物の世話を取り入れることが出来なかった。保育計画の決定だけでなく、こまめな見直しや再構築のための時間的余裕を見込んで進めていくべきであった。</p>
<p>防災・省エネ対策などについて</p>	<p>年度末、3月11日に起きた東日本大震災を受けて、日常的な防災対策の必要性を再確認させられた。特に地震に対しては、日頃からの避難訓練がいざという時の子ども、職員の動きに直結し、3月11日当日もその成果のため落ち着いた行動し、きちんと避難行動ができた。備蓄品については食料、水ともにそこそこの用意がありその他の装備品についても、毛布や野営以外の物品は揃っていた。今後は、保護者との連絡（電話、メール等）や交通機関の不可能な状況を具体的に想定した連絡体制～教職員も含めた数日間の子どもの預り形態・必要品の確立が急がれる。</p> <p>東日本大震災に伴い、原発事故による放射線の影響という課題も浮上した。今回の事故に際して当幼稚園では、安全に、安心して外遊び・泥んこ遊びができることが課題であり、砂場、園庭の表土や砂の入れ替え並びに測定器による日々の放射線量の変化を独自に把握して対応する。</p> <p>省エネ対策については、消費電力の削減割合が特に定められた施設ではないものの、努力義務としてける「省エネルギー実施要領」に基づき照明と、夏季は冷房機器についての管理に注意したい。また、水道の使用（出しっぱなし）などについては日常的に子供たちにも注意を呼びかけている。</p>

5、学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

個々の学年、並びに2歳児教室の取り組みについては、子ども達の年齢に応じた、そしてそれがどのような経験を通して成長していくのかについて個別及び全体として把握し、より多様な感情や経験をjする機会をつくることに対して各人それぞれ意欲的、挑戦的、創意工夫のもとに臨んでいることが伺える。

平成22年度からは、教員が互いの引き出しや子ども達へのアプローチの仕方を倣ったり、また自分の保育を客観的に省みるために園内での互いの保育を参観する場面なども取り入れるようにしたり、互いの保育日誌・カリキュラム編成についても見たり、意見を述べる機会を作ってきた。

幼児の保育に直接、間接に携わる教職員のチームワークや組織体制の強化という観点で言えば、それがどんな目的で、どこへ向かうのかを前教職員に明確に提示して共有させ、一人ひとりが主体的にこれを実現しようという意欲を引き出すことが求められる。

最終的には、この幼稚園の教育方針に則った子ども達の成長過程に最大限、貢献する喜びこそが組織強化の原点である、このことを踏まえ職員間の情報の共有化や意見の交換などのための環境を更に工夫して、研鑽を重ねていく必要がある。

6、今後取り組むべき課題

前年度に引続き在園児の保育を骨子に、地域の就学前子育てセンターとしての機能の充実に向けての取り組みを強化したい。及び、園業務全般において、教職員一人ひとりが主役となって企画・運営を励行する体制として園務分掌を明確に定め、その監督と検証をもって保育内容や業務の改善を日常的、緊密に行い、運営の活性化と拡充（認定こども園に準じる）に向けていく。

7、学校関係者の評価 / 学校法人評議員会

保育参観について、平成21年は度早速、保護者の方々の声を反映した保護者参観の形態や参観方法の見直しに着手された。また、年齢に応じた子どもの発達とその連続性については多学年の担当教諭らとカリキュラム編成時などに協働したりとの連携があったとのこと。職員研修などにもますます力を入れて、個々の保育の質を上げる努力も行なっている。

今年度（平成22年度）急に浮上した政府案の「こども園」構想に対しては、幼稚園教育の本質を見失わず、かつかねて目指してきた「認定こども園」に準じた一層の子ども支援に力を注いで欲しい。

今後は、上にもあるが、園内組織の強化とマネジメント化の確立によって、無駄（な時間）を省きその分を教職員の学年間、個人間、全体での研究や交流にあてて、努力されることを望む。

以上